

# 『落合新聞』の研究（6）

A Study of the “Ochiai Shinbun” (6)

福井 延幸

(Nobuyuki FUKUI)

キーワード：地域新聞・落合秘境・おとめ山公園・環境保全・文化人

Key Words：Local newspaper・Ochiai Unexplored Area・Otomeyama Park・  
Environmental protection・Culture people

## I.はじめに

『落合新聞』とは東京都新宿区下落合に在住であった竹田助雄が昭和37年から42年にかけて発行していた地域新聞である。筆者はこれまで5年にわたり『落合新聞』を題材に高度経済成長期における落合の諸相について論じてきた。その『落合新聞』の活動において、発行人の竹田助雄が自ら最も評価しているものの一つが現在のおとめ山公園につながる「落合秘境」の保全活動であった。

竹田は、昭和42年10月26日発行の第50号4面の「終刊に際して」で、この保全運動について、「落合新聞の中で座談会「明治の思い出」（約百三十枚）「敗戦の記録」（約五十枚）この二つは光っているものと自負している。町づくりでは“落合秘境”とその緑の保存であろう。これは多くの人の英知と努力の結集によって得たものであるが、もしかりに、この新聞が出ていなかったなら、私はあれだけの勇気を持つことができなかつたであろう。」と述べている。

ここでいう「明治の思い出」・「敗戦の記録」とは、近代の落合に関する連載に関連した座談会を記事化して掲載したものであった。「明治の思い出」では座談会の冒頭で参加者に「国には国の歴史がありますように、村には村の歴史があろうかと存じます。とくに今日は「私の落合史」とでも申しましょうか、記憶に残り始めた幼年時代のことから、村の様子などを見たまま聞いたままあれこれお話しねがって<sup>1)</sup>」と述べている。「敗戦の記録」でも「歴史の枝葉としても、地域をもっと掘下げて何らかの形をあたえておくことは、何か役立つ時があるのではないか」と企画され、「地方史的な意味での“私の戦争の記録”<sup>2)</sup>」だと竹田はいう。地域に暮らした人々の言を利して郷土史を編む作業を『落合新聞』で行っていたのである。このように地域との共同作業によって、郷土史を編むことで『落合新聞』を地域のアーカイブたらしめんとする目的を持っていた<sup>3)</sup>竹田であり、『落合新聞』の業績は落合の郷土史に多大な影響を与えているが、その仕事に並ぶ自負を持っていたのが「落合秘境」の保全活動であった。

---

ふくいのぶゆき：目白研心中学校高等学校教諭

この「落合秘境」保全活動については、その当時の記録として『落合新聞』に、そして「自伝に地誌を多分に取り入れた<sup>4)</sup>」という竹田自身の著作である『御禁止山—私の落合町山川記』に詳細に記録されており、現代において「落合秘境」問題関連の郷土史の根本史料となっている。『落合新聞』は、現代の「おとめ山自然公園」につながる「落合秘境」保全活動の原動力であった。本稿においては、この『落合新聞』による保全活動の意義を同時期の他の環境保全活動と比較しつつ、当時、地域住民の多くが触れることができたであろう『落合新聞』を題材に考察していく。

## Ⅱ. 高度経済成長期の環境保全活動の潮流

### 1. 公園緑地侵犯対策協議会

『落合新聞』が発行されていた昭和37年から昭和42年にかけては、東京オリンピックに向けたインフラ整備が急速に進み、またオリンピック後の選手村跡などの土地利用についての問題提起が数多くなされていた。東京圏の急激な人口増加<sup>5)</sup>に伴い住宅難も深刻で、環境の破壊を伴う宅地造成も進んでいった。

昭和40年代に至ると急激な都市人口の集中と過密化のため、都市における各種の公害が激化し、生活環境の改善と緑の保全の必要性が国民サイドから叫ばれるに至った。公園緑地の歴史においても昭和41年から昭和50年にかけては「自然環境保全時代」と区分・評価されている<sup>6)</sup>。

関西圏においては昭和30年代後半より、奈良では三笠山の三笠温泉に対する批判<sup>7)</sup>、平城宮跡の近鉄車両基地建設問題<sup>8)</sup>、京都では京都タワーの建設問題<sup>9)</sup>、双ヶ岡の開発問題<sup>10)</sup>など近代化と歴史的景観や文化財の破壊を伴う開発の問題が大きくクローズアップされていた。いずれも適法なものではあったが、世界的な歴史的景観を誇る奈良や京都でさえも開発の波に晒され侵されていくのである。

東京都においてもオリンピックが終了した翌年の昭和40年度には、それまで駒沢公園と神宮外苑周辺の整備につき込んでいた予算を例年の倍近くに増額し、代々木森林公園の着工をはじめとして31公園の用地買収、45公園の施設造成をすることを東京都建設局が東京都議会へ提案することが報じられている<sup>11)</sup>。子供の遊び場を求める全国的な潮流<sup>12)</sup>や落合地域における児童遊園設置を求める動きの活発化<sup>13)</sup>も同時期のことであるが、その用地として既存の公園の敷地を利用したり、地域の貴重な自然が破壊されるということもみられるようになっていた。

このようにさまざまな形で開発が進む中で、地域環境や歴史的景観を守るべく立ち上がる動きが各地でみられるようになった。その一つが公園緑地侵犯対策協議会である。この協議会については、

現在全国的な問題となり、国民の大きな関心の的となっている自然の破壊、都市域における

公園緑地に対する侵犯には目を掩わしめるものがある。現に、新聞の報道および見聞するところによれば、東京においては、代々木森林公園に対する国立近代美術館、日比谷公園の一角に予定されている貿易関係の高層ビル、駒場公園の近代文学館の建設等、これら都心に近い全都民的な貴重な公園地に対する大規模な構築物による侵犯が企図されつつある。以上のごとき、まことに憂慮すべき事態に対処するため、左記団体および各界の学識経験者は、四月一日午前十時半より午後にわたり急きよ会合して真摯な討議を重ねた結果、これらの各種緑地侵犯行為に対し断乎として全面的反対を表明、直ちに適切有効な措置を講ずるとともに、近々第二回目の会合をもちあわせて、この緑地侵犯対策協議会を恒久的組織として存続させることに決議した<sup>14)</sup>。

として都内の公園地を利用して大規模施設が建設されつつある中、その「侵犯」に反対するため組織された。参加組織として、都市計画協会・日本都市計画学会・日本公園緑地協会・東京都公園協会・首都緑化推進委員会・大日本山林会・日本自然保護協会・日本造園学会・日本レクリエーション協会・日本建築学会・首都圏協会・都市美協会・東京商工会議所・東京市政調査会の名が挙がり、学識経験者として東京大学名誉教授本田正次・同内田祥三・東京都市計画地方審議委員会委員折下吉延・東京大学教授横山光雄・千葉大学教授小寺駿吉らの名が挙がっている。この動きは全国紙にも取り上げられ<sup>15)</sup>、建設省や東京都の公園行政の批判がなされていた<sup>16)</sup>。

この公園緑地侵犯対策協議会による批判の一つに国立近代美術館移転問題があった。東京・京橋にあった国立近代美術館が老朽化により移転することになり、文部省はその候補地として皇居北の丸地区、文京区湯島旧岩崎邸、代々木のオリンピック選手村跡の三カ所を検討し、代々木のオリンピック選手村跡を候補地として用地を提供するよう東京都に働きかけ始めた<sup>17)</sup>。

しかし、この選手村跡を利用しようとする動きに対しては、選手村跡の一部がすでに税務署員のアパートに転用されていたことと合わせて批判の声があがっていた<sup>18)</sup>。都内の都市学者・建築家・緑化推進関係者の間からも強硬な反対の声があがり都市計画協会・日本公園緑地協会・大日本山林会など14団体の代表が集まり昭和40年4月1日に「東京の緑を守る会」を開き反対の態度を決めた<sup>19)</sup>。また、この問題に対してスポーツ議員連盟は、「原則として反対だが、やむを得ず移転するなら規模を小さくすべきだ」との意見を表明し、新たな移転先として港区麻布龍土町の旧連隊跡（歩兵第三連隊）を提案していた<sup>20)</sup>。その後、中村梅吉文相が閣議で移転計画について説明することになったが<sup>21)</sup>、オリンピック村跡地はスポーツセンターにしたいという体協の意向を受けた石井光次郎法相は北の丸公園への移転を主張、瀬戸山三男建設相は北の丸公園が狭くなるという理由から代々木にすべきだと主張し意見の一致は見られなかった<sup>22)</sup>。

この問題に対して公園緑地侵犯対策協議会は同年12月23日、佐藤栄作首相・建設・文部・

大蔵・厚生各大臣と都知事にあてて東京都市計画中央公園のうちで最も重要な散策地にあたるとして「旧皇居北の丸地区に国立近代美術館を作るのは反対である」という陳情書を出している<sup>23)</sup>。

候補地決定が難航していた国立近代美術館移転であったが、石井法相・中村文相・瀬戸山建設相・橋本登美三郎官房長官の間で調整が進められた結果、翌昭和41年1月10日の事務次官会議で北の丸公園に決まり11日の閣議で正式了承となった<sup>24)</sup>。反対運動は結実しなかったが、都市公園法に逆行するような、公園緑地になし崩的に各種施設を建設しようとする流れに歯止めをかけようと専門家による発言が続けられていた。公園緑地侵犯対策協議会は、この移転問題に対して世論を喚起すべく専門家集団として積極的に発言を続けていた。

## 2. 鎌倉風致保存会

同じころ鎌倉では「鎌倉風致保存会」の活動が始まっている。日本のナショナル・トラスト運動の嚆矢ともいわれる「鎌倉風致保存会」は昭和39年、鎌倉の鶴岡八幡宮の裏山にある御谷に業者が宅地造成を計画したことがきっかけで生まれた。同所が都市計画法で定められた風致地区に指定されているところから、業者は鎌倉市を通じて神奈川県知事に、工事着工の許可を求める手続きをとった。これに対し鎌倉市は同意の意思を示して神奈川県に上申していることが伝わると、地元の住民を中心に反対運動がおこった。このまま工事が認められると、鎌倉のメインストリートである若宮大路から鶴岡八幡宮の社殿をのぞむ景観が台無しになってしまうというのである。住民の要求を受けて内山岩太郎神奈川県知事は現地を視察したが、その時鎌倉で行った記者会見で、知事は「法的には抑止するのは難しい。残るは住民の力だけしかない」と発言した。この知事の発言から、住民たちは財団法人を結成して土地買い取りの運動をおこす以外道がないことを自覚したのである<sup>25)</sup>。その後、昭和39年12月25日に設立された「鎌倉風致保存会」の設立趣意書<sup>26)</sup>には、

鎌倉は自然の風景と豊かな文化財に恵まれているが、これを大切に保存して後世に伝えることが鎌倉の誇りであると同時に、鎌倉に託された貴い使命であると信じます。しかし、この風致や文化財を保存することは、他面において個人の所有権を規制することになり、この社会の要望と私権の尊重とを、どのように調整するか、この点が大変に困難な問題であります。現在の国や県、市の行政では、これを調整処理する機能がありませんので、ここに財団法人鎌倉風致保存会を設け、将来に保存すべき風致の地域や物件を具体的に認定し、その認定したものを保有し、さらにこれを維持管理しようとするものであります。

とあり、「将来に保存すべき風致の地域や物件を具体的に認定し、その認定したものを保有し、さらにこれを維持管理」すること目的に設立されている。風致や文化財の保存のために財源を市民などの寄付でまかない保有・維持管理しようとするものであった。同会の理事でもあ

る大佛次郎がこの問題について朝日新聞に連載<sup>27)</sup>した際にイギリスのナショナル・トラストの概念を紹介しており、日本におけるナショナル・トラストの嚆矢ともいえる活動となった。

初代役員の構成は理事長=藤井崇治・元電源開発株式会社総裁、副理事長=村田良策・神奈川県博物館館長・鎌倉市文化財専門委員会委員長、理事=野尻清彦(大佛次郎)・作家、同=菅原通済・常盤山文庫理事長、同=保谷千代松・鎌倉商工会議所会頭、同=山本正一・鎌倉市長、同=迫政男・鎌倉市議会議長。ほかに評議員として鎌倉八幡宮宮司、大船ロータリークラブ、鎌倉の自然をまもる会、鎌倉三日会、鎌倉観光協会、鎌倉市医師会、鎌倉市仏教会、鎌倉地区自治組織連合会、鎌倉市緑化委員会、鎌倉市森林組合などの各会長と市の助役、総務部長が名を連ねた。さらに顧問として歴史学者の亀井高孝、外交官沢田節蔵、作家里見弴、漫画家横山隆一、作家今日出海、画家有島生馬、同小倉遊亀、英国人作家ルイス・ブッシュの名がみられる<sup>28)</sup>。

財団は昭和39年から43年までの間に総額3137万2045円の募金を集め、これにより昭和41年6月30日に、鶴岡八幡宮の裏山の御谷の宅地造成予定地の山林の一部、1.5ヘクタールを1500万円で買収した。こうしてわが国初のナショナル・トラスト運動による土地の取得がなされ、宅地造成の事業は中止された<sup>29)</sup>。地域住民のみならず鎌倉在住の文化人や鎌倉にかかわる諸団体や行政関係者なども加わりオール鎌倉の体制で活動は進められていった。反対運動が展開されたにもかかわらず開発や歴史的景観の破壊が進んでいった事例も多い中でこの「鎌倉風致保存会」による景観保全活動は、この時期における成功例の一つとなった。

「公園緑地侵犯対策協議会」の活動も「鎌倉風致保存会」の活動も、全国紙でしばしば報道されていた。これら組織について『落合新聞』やその他の著作において竹田の言及は見られない。しかし同時代の環境保全に関する問題について「落合秘境」保全との関連で竹田がこれらの活動について目にし、関心を寄せていたことは十分に考えられる。

### Ⅲ. 落合秘境の保全活動

#### 1. 「落合秘境」保全活動のはじまり

『落合新聞』には、「落合秘境」に関連する記事が3・8・12・20・22・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・47・50号と全50号中の半数以上となる計27号で掲載されている。その内容は、啓蒙ともいべき「落合秘境」についての周知とその貴重な自然が失われつつあるという警告、「落合秘境」の保全活動に向かう決意表明、そして具体的な保全活動を報じ、その後の経過を伝えていくという4段階に分かれている。

「落合秘境」に関する『落合新聞』の記事初出は、昭和37年7月12日発行の第3号1面「落合の秘境 湧き出づる泉 流るせせらぎ」であった。

この写真三葉は、現実に落合に存在する風景であって、秩父や多摩の奥地などで写して来た

ものではありません。去る六月雨後のひととき、全写連会員守屋俊男氏に依頼して撮影したもので、ここには泉が湧き、せせらぎがあり、鳥が啼き、コジュケイやキツツキなどの野鳥の群と美しい響きがある。「落合の秘境」とか「落合の尾根径」とかいうのは、編者が勝手につけた名で、事実、その名の如き処である。

いまから百六七十年前、寛政年間に金子直徳という人が著わした書物に「和佳場の小図絵」(わかばのこずえ)という郷土史があった。その中に、この写真附近を次のように書いている。「御とめ山。藤いなるのつづき山にて、南は大久保、四ツ谷、東は牛込辺の町々、西は中野・淀橋辺を見渡して、佳景云んかたなし。近く外山の笠松、玉川井の頭の流、田の間に間に白布を引くがごとく、俳・姿見辺の遠近の村家こなたの森、そなたの村々、たぐいなき風姿自然にして、ながめあかずと云り。人此山に登る事を禁ゆえに、くわしくは不知也」と。(海老沢了之介編より)この地一帯を「おとめ山」(御禁止山)と称したのは禁猟区を示したもので将軍家が度々狩猟に来ていた所である。この「おとめ山」を南北に二分し、北側の高い方を近衛家、南側の低い方を相馬家が譲り受け相馬家は林泉院と称して一と通りの施設をしたが、大正初年頃近衛公爵家は分譲し、その後、相馬子爵家もまた分譲した。つまりこの写真の位置は旧相馬家の屋敷内で下落合一丁目三一〇番地、現在は東邦生命社長太田清蔵氏の所有になっている。氏は目黒におられ、子息は当写真附近におられるが、留守居として鹿野仁之さんが入口の古風な門のある家に住んで守っている。

かつてあった黒門は九州に送りいまはなく、彼の地で台風で破損したと近くの古老から聞いた。池、川には魚影濃く沢蟹もいたがいまはいない。僅かに、ヘビが棲む。林泉院は池中に弁財天をまつり、形は残しているが、あたりの風情は一変した。

と3枚の写真とともに紹介しているのが初出である。貴重な自然の残る様子を寛政年間の「若葉の梢」を引きつつ周辺の歴史に触れながら描写している。また、この後の保全活動の対象となる「落合秘境(落合の秘境)」の語もこの時が初出である。

次いで昭和38年3月8日発行の第8号2面「むかしを語る落合の秘境」では、

当地でもいまもお武蔵野の風景を止めているのに「落合の秘境」と「目白学園」の雑木林がある。前者は三号で既に紹介した通りで、あそこのせせらぎや森には渡り鳥の囀りが絶え間なく聞こえ、狭いけれど草原があり、秋になると萩が咲き尾花がなびく。雑木林ではヒグラシがにぎやかだ。その辺の草むらからは兎が飛出してくるような気さえする。こうした自然の美しさがこの町の片隅に残っていることはたのしいことである。

と「落合秘境」を「目白学園」の雑木林とならべて武蔵野の風景をとどめているものとしてその価値を紹介している。昭和30年代、目白学園の雑木林は地域内において武蔵野の風景を

とどめている景観として周辺からも認知されていたことを『落合新聞』からうかがい知ることができる。

その後、昭和38年7月12日発行の第12号2面の「七曲り 自然の美」で三たび「落合秘境」について紹介している。

「落合の秘境」だとか「落合の尾根径」だとか、本誌ではしばしば取上げて来た下落合一丁目元相馬邸跡の原生林は、東京のド真ん中に数少く存在する幽遼の一つである。夏の朝など、谷川の清水が冷たいせいか林の中に霧がかかっていかにも奥深い感じがする。あそこはむかし相馬邸以前は酒井大内記旗本五千五百石の下屋敷の一部で、のちに相馬家が譲り受けほぼ昔のまままで今日に至っている。またあそこは、いつの頃だが時代は分らぬが地方豪族が望楼を建て見張りをしたから、寝ず見山（鼠山）の発祥地はあの付近だという説もある。そのせいか展望もすこぶるよい。「戸山の笠松、玉川井の頭の流れ田の間に間に白布を引くが如く云々」「佳景云んかたなし」と詠んだのもあそこである。

最近までその場所をモノにしようと土地ブローカーが頻りに出没していたとも聞いた。そのたびに現所有者東邦生命社長太田清蔵氏は断って来たということである。よそ様の土地に対してとやかくいうのは非礼かも知れぬが、無味乾燥なビルは建てたくない。またあそこは無断で入ってはいけないのに、近頃は心なき者がだいぶ荒したあとも見える。

ビルは建てることはできるけれど自然は破壊すると再び戻ってこない。東京が都会化すればするほど、自然は一層尊くなる。やがてヒグラシの声も聞けるだろう。

とコラム欄「七曲り」に掲載されたこの記事は、歴史にふれその価値を紹介するだけでなく、この号では失われた自然は再び戻ってこないという警告を始めている。

『落合新聞』のコラム欄には「翠ヶ丘」と「七曲り」との二つがあった。いずれも落合地域の地名に由来するもので、「翠ヶ丘」はより地域に密着した内容の雑記事・コラム、「七曲り」は、時期によりその性質も変化しているが、内容としては地域に関するコラム・提言であった。コラムとは生きた声であり、「七曲り」、「翠ヶ丘」には、個人としての雑感・怒り・悲しみなど筆者の心情が表現されていて、竹田の作家性が垣間見えるものとなっていたが<sup>30)</sup>、失われつつある落合の貴重な自然に対しての竹田の心情と保護の感情がこの記事には表れている。

「落合秘境」保護の心情と警告は、自ら執筆した記事だけでなく寄稿によっても補強されていた。昭和39年7月27日発行の第22号4面「落合秘境にえびやさわ蟹」の中でも告白しているが、竹田が同人であった雑誌『文芸首都』に同じく参加していた北杜夫に原稿を依頼する際に「落合秘境」について保存を促す助言を原稿に加えてくれるよう依頼していた<sup>31)</sup>。

## 2. 「落合秘境」保全活動の意思表示

昭和39年5月20日発行の第20号2面のコラム「翠ヶ丘」で竹田はおとめ山保全の意思を明らかにする。筆者の心情が表現されているコラム「翠ヶ丘」で明らかにされているところが、その後の活動を考えると示唆的である。

下落合一丁目の弁財天の池は、江戸の頃は酒井家の下屋敷でその後相馬家が譲り受け、湧水を利用して池を造り、池の中央に弁財天を祠った。ここは今でも子供達が四ツ手や釣竿をかついでやってくる。「おとめ山」の谷に滾々と湧出づる泉が落合の秘境を流れてこの池に流れ込み、ヤ生のくちぼそがいまもお遠い祖先の昔から生きのびている。赤むしを餌にして釣糸をたれば、たまに二寸くらいの口ぼそが釣れ、四ツ手を持つ子のかんからには可愛いのが十五、六匹入っていた。春には無数の子が生れ、根気よく子孫をはぐくむから、子供達が捕るくらいでは絶えることはない。脅威は子供よりもむしろ大人のような。池の上手の谷は埋立られてしまったが池には青草が蘇生し、自然に生き抜こうとする生命は根強い。ここからおとめ山の雑木林にかけては武蔵野の面影をそっくり残している景勝地なので、ここを何とか風致地区にしたいと思い正直いって何度も採上げてきたのはそのためである。

このコラム「翠ヶ丘」は「ここを何とか風致地区にしたい」という竹田による「落合秘境」保全の意思表示となった。「風致地区」の語は景観保全のためのキーワードとなる語である。この意思表示がなされた昭和39年は新聞報道でも「風致」の語が盛んに用いられていた。昭和39年8月4日『朝日新聞』2面「社説」では「愚かな風致自殺」のタイトルで「緑地風致地区」であるにもかかわらず建設省が開発を進めようとしていた東京多摩川の団地問題と京都駅前前の「京都タワー」、奈良公園内の奈良県庁舎をとりあげ「まことに愚かな風致自殺ではないか」との批判が繰り返されている。また、昭和39年11月25日『朝日新聞』1面「天声人語」では、日光戦場ヶ原、京都双ヶ岡が開発に晒されつつあることとならんで鶴岡八幡宮裏までが開発されつつあることを紹介し、「鎌倉風致保存会」による“風致防衛”について言及している。環境や歴史的景観保護の問題で、守るべき「風致」という言葉がこの時代のキーワードの一つであった。

風致地区は、大正8年4月に制定された旧都市計画法により創設されたもっとも歴史が古い地域地区制度である。東京都では大正15年に全国に先駆けて明治神宮風致地区が指定された。そして昭和8年には落合地域が一部含まれていた野方風致地区を含む8地区が指定されている。これらの指定の目的は武蔵野の景観保全である。その後、市街化の進行など指定当時と環境が著しく相違しており昭和38年には初めて風致地区区域の大規模な見直しが行われた。この時、野方風致地区は廃止されたのである<sup>32)</sup>。高度経済成長期、いわゆる“近代化”が進み多くの自然が失われ、「風致」の見直しがなされたのもこの時期であった。その失われつつあった「風致」の概念を用いて「落合秘境」の保全を図るべくその意思表示を行ったのである。

### 3. 「落合秘境」保全活動の転換点

「落合秘境」保全の意思を表明した昭和39年半ば以降、「落合秘境」に変化がみられるようになった。昭和39年7月27日発行の第22号4面「落合秘境にえびやさわ蟹」では、

下落合一丁目「落合秘境」は、いつの間にか管理人のいる家を取り毀し森の番人もいなくなったので子供たちが原生林で蔽われた谷川の流れて遊んでいる。カンカラをのぞいたら、珍らしいことに、二センチほどのヌカエビが十匹、一センチほどのサワ蟹が一匹入っていた。ここにはまだそういうエビや蟹がいるのである。恐らく東京のだ真中に蟹のいるのはここだけだろう。蟹を撮影しようとしたがあまり小さく押えつくと死んでしまうのでやめた。夏になると、真先に蝉が鳴くのもここ。こんこんと湧き出づる泉をむかしは丸山の流れといい、その頃無数にいた蟹の子孫が今もまだ僅かにこの谷川に生きている。以前本紙で北杜夫氏が「こうした場所はいざ失われてみると、その貴さが分る。」と書いてくれたのはここを自然公園にでもして都会に残したいと筆者が云ったからである。

と竹田は、管理人の家が取りこわされ森の番人がいなくなっていたことを目にして記事にしていたが、これはそれまで「落合秘境」に管理人を置いていた東邦生命社長の太田氏が「落合秘境」の土地を手放し所有者が変わっていたことを示していた。この段階では竹田はこの変化に自覚的ではなかったが<sup>33)</sup>、所有者が東邦生命社長太田氏から三井不動産、さらに大蔵省へと変わり、大蔵省によって開発が始められていくのである。

この第22号の記事の後、「落合秘境」関連記事は8カ月ほど途絶える。第22号の後もおよそ1か月に1号のペースで23号・24号と発行されたが、竹田の多忙もあり、『落合新聞』は昭和39年10月から翌40年3月まで5カ月の間休刊した。時を同じくして「落合秘境」の開発が始まり、その開発の主体が大蔵省であることがわかると、『落合新聞』は秘境の保全に向けた具体的な行動をとり始めた。この昭和39年から40年にかけての落合地域は、住居表示問題の議論が沸騰していた時期でもあったが、その中で「落合秘境」開発問題が巻き起こるのである。昭和40年4月9日発行<sup>34)</sup>の第26号1面トップ記事の「破壊される落合の秘境 大蔵省が宿舎建設 森林を伐採?清流を埋め」は「落合秘境」破壊を告発する記事であった。

都内では珍らしい“秘境”の一つ、下落合一丁目三〇三番地附近「おとめ山」(御禁止山)の森林地帯が国有地になり、“秘境”の外苑を崩して、大蔵省が宿舎建設工事を急いでいる。東側の弁財天は三月末現在、半ば埋まり、釣竿や四つ手を持つ子供達が最後の魚とりに夢中になっていた。

周知のごとく、ここは「江戸名所図会」にも描かれた風姿自然の佳境で、武蔵野の風景を今に残している得難いところである。泉はこんこんと湧き、せせらぎは谷合を流れ、野鳥は昼夜啼く。沢蟹や雑魚のいるのは都内広しといえどもここだけになった。落合中学PTA会長井戸

清隆氏は、山や森林の崩潰を憂い、さる日、新宿区役所土木課公園係の来観を要請し、緑地帯保存の貴重さを事実によって訴えた。ここは隣に落四小学校、落合中学校をひかえ、一朝事あるときには最適な避難場所でもある。火災などの場合、校庭避難がいかに危険であるかは、いまさら説明の要もあるまい。

「おとめ山」はもと、しばしば書いてきたように一酒井大内記旗本五千五百石下屋敷の一角で、明治のころ、東北の高台を近衛公爵家が、下とおとめ山一帯を相馬子爵家が譲り受けた。その一部は藤稲荷社（二面参照）の所有になっている。戦後、山は東邦生命社長太田清蔵氏が買取り、久しくそのままだったが、最近太田清蔵氏は三井不動産に譲り、三井は大蔵省と土地交換をした。

三月二十九日、宿舎建設当局、大手町合同庁舎七階建設課および宿舎課を訪ね、建設計画をただしたところ、総数約八千坪の“落合秘境”の部分四、五千坪はまだ具体的な設計は進んでいないようだ。基本的には谷や森林を造成しながら宿舎を建てる計画とのことであった。宿舎課長御沢勲氏は「方々調べつくし、公園にする計画がないから買取ったので、公園予定地を無視したのではありません。誤解のないように」という。また、現地を見てきた同課の職員氏は、「東京にもまだああいうよいところがあるとはおどろきました」と認めていた。誰しも実感は同じであろう。ここは二年前にすでに都に自然公園にしてくれるよう懇請したことがある<sup>35)</sup>。

と、大蔵省の公務員宿舎建設計画によって貴重な環境が破壊されつつあることを報じるのである。ただし、大蔵省側も「方々調べて公園にする計画がないから」建設計画を進めると言い、職員の中にも「東京にもまだああいうよいところがあるとはおどろきました」と評価するものもあった。そして、この「破壊される落合秘境」の記事に続く「おとめ山を護る 歎願運動起る」で「落合秘境」保全運動の始まりを告げていくのであった。

「おとめ山」を惜しむ人は無数なので、下落合一丁目界限では、井戸清隆氏を中心に、山を護りここの緑が公のオアシスになるよう目下田中大蔵大臣あて嘆願書の製作や署名運動を展開している。署名は十日に了え陳情団を編成す。

と、大蔵省による建設工事の開始と田中角栄大蔵大臣への嘆願書作成や署名運動の展開といった「落合秘境」の地域ぐるみでの保全活動の始まりを伝えている。2面では「江戸の落合⑫」で「落合秘境」の江戸時代のころの姿を記録した「江戸名所図会」下落合村藤稲荷社附近の解説をし、また「遊歴雑記」の藤稲荷の項目を紹介しており、「落合秘境」の歴史的な価値を伝えている。

実際の保全活動と、およそ1か月に1号の発行で速報性はない『落合新聞』の報道には時間差があった。3月下旬には、すでに造成のために「落合秘境」の斜面の一部が切り崩され

始めており、29日には公務員宿舎建設を担当する大蔵省関東財務局を訪ね工事中止を求め一方、地元在住の池田正之輔衆議院議員を介しての関東財務局への工事中止の要請や田中角栄大蔵大臣への嘆願、全国紙への周知<sup>36)</sup>、地元在住の文化人巻き込みでの署名活動が進められていた。実際は、この第26号が発行された4月上旬ごろ保全活動は佳境を迎えていたのである。そして保全活動に決着がついた後の昭和40年5月3日に第27号が発行された<sup>37)</sup>。この第27号はさながら「落合秘境」保全活動総決算号のようであった。

#### 4. 「落合秘境」の保全活動の達成

##### ① 1面トップ記事

第27号の1面トップは、「落合秘境や三つの沼「きちんとする」田中大臣が確約」の見出しで「落合秘境」の保全が田中角栄大蔵大臣によって約束されたことを伝える記事であった。

武蔵野の面影を今に残している「おとめ山」（御禁止山）の原生林約一万平方メートルや、落合秘境を守ろうとする都民の代表五人が、四月十二日午前、地元文化人ら三百七十五名の願いをこめた陳情署名簿をたずさえ、文京区高田豊川町・田中蔵相の私邸を訪問、約十分間にわたり保護を訴えたところ、大臣は、秘境や泉の沼など、「きちんとする」とはっきり約束した。

と竹田らの陳情団が田中邸を訪問、文化人ら地域の人々の署名とともに「落合秘境」の保護を訴え、その保全が約束されたことを伝えている。田中邸への訪問時の写真とともに、この画期的な出来事を伝えるのである。

##### ②ドキュメンタリー—田中角栄への陳情

1面トップ記事の「落合秘境」保全の確約記事に続くのが、田中邸での陳情当日4月12日のドキュメンタリーである。竹田らが陳情に訪れた田中角栄は当時46歳。昭和37年7月改造の第2次池田勇人内閣第2次改造内閣で史上最年少の44歳で大蔵大臣に就任した田中は、引き続き第1次佐藤栄作内閣でも大蔵大臣を務めていた。昭和40年6月の内閣改造で大蔵大臣を辞し、同年12月に自由民主党幹事長となっている。当代随一の政治家であった田中角栄に対する陳情は、新宿区長や東京都知事への陳情を経験していた『落合新聞』にとっても画期的な出来事であった。

その田中角栄に対しての陳情を橋渡ししたのが池田正之輔であった。池田正之輔は下落合在住の衆議院議員で第2次池田内閣で科学技術庁長官をとして入閣した政界の実力者であった。「天下のご意見番」と自称し、「カミナリ彦左」の異名をとってまれにみる毒舌家として知られた人物でもあった<sup>38)</sup>。竹田らが陳情に与えられた時間はわずかなものであったが、そのわずかな時間を最大限生かそうと周到な準備がなされていた。1面「池田正之輔さんが蔵相との橋渡しを」では、当日の朝から田中邸でのやり取りの様子を詳細に記録している。

この日朝七時三十分、井戸清隆さん（下落合一の四〇四）ら代表五人は、落一小学校前の下落合三の一四二一、同じく代表新宿区少年委員・隼田敬次朗さん宅に集まり、そこから四、五軒西坂寄りの衆議院議員池田正之輔氏（自民・元自治大臣<sup>39)</sup>）の庭で、待機した。池田さんが田中蔵相に電話で面会場所を問合せることになっていたので、結局、池田さんの橋渡しで、高田豊川町の私邸に行くことになり、池田さんの第一秘書相馬大作氏と共に、読売新聞社、読売テレビニュースの車に分乗、九時、田中大蔵大臣を訪問した。日本で二番目に忙しい大蔵大臣のことであるから、面会時間は五分一十分と見、説明役は井戸さんほか一名が努め、大臣の返事を一句でも聞き洩らさぬ役などを分担した。陳情団は井戸、隼田、竹田のほかに、下二丁目から武藤万三（七四二番地）下三丁目から粕谷喜一（一五〇九番地）さんたち。

と、田中邸に向かう直前の緊張感を伝えている。そしてその後の田中邸での様子は、同面「おとめ山自然公園設置と開放を懇請」で詳細に伝えられている。

安倍能成、南原繁、舟橋聖一氏ら地元有志三百七十五名の署名簿と落合秘境保護開放運動に関する各社新聞切抜き（読売・毎日・東京・産経・朝日）を田中さんにまず見てもらう。田中大蔵大臣はあらかじめ調査していたらしく、自分で現地の地図を書いて事情をきいたが、時間の浪費をふせぐため手早く説明できるように用意した「おとめ山自然公園設置保護地帯の見取図」（左図参照）や、現地写真十二枚を大臣に示し、「ここを自然公園にして保護、ここを児童遊園にして保存開放してくれるように」頼み、「泉の沼や弁天池に崩れ込んだ土のために二、三カ所、秘境の生命である清水がふさがれたから、土をどかしてくれるように」。また、「これ以上破壊しないこと」を歎願したところ田中さんは、一つ一つうなずき、「きちんとする」と答えたので、代表団は希望が通ったものと見て喜んで引揚げた。

「五分一十分」と思われた面会時間のため周到に準備をして、はじめに署名簿と新聞切抜きを見せている。一方、田中角栄も自分で現地の地図を書いて事情を聞けるくらいの独自の調査をしており、「コンピューター付きブルドーザー」とあだ名された明晰さの一端が伝えられている。後述のように「落合秘境とはあなた方が勝手につけたのだろう」との反論も田中からは加えられるが、「落合秘境」の自然公園としての保護と児童公園としての保存開放、造成のために崩された斜面の土の撤去、これ以上破壊しないことの三点に対し、「きちんとする」という回答を得た。「落合秘境」保全を達成した瞬間であった。

「落合秘境」保全の確約を得て竹田らは田中邸をあとにした。翌日には関東財務局から担当者が来訪し、秘境の公園化の意向を伝えるのである。同面の「秘境の公園化は常識 心配しないで欲しい 関東財務当局も約束」では、

陳情団が田中蔵相に“直訴”した翌日、すなわち四月十三日午前十時関東財務局管財部次長平野寿氏は、同建設課長伊藤保親氏宿舍課長御沢勲氏を同行、下落合一の四〇四、井戸清隆氏宅に來訪、地元有志代表（井戸、隼田、竹田）と懇談して後、平野氏は次の通り好意ある意向を發表し約束した。

秘境を公園化することは常識として前々から考えていることであるから、あまり心配しないで欲しい。独自の判断でできないこともないので皆さんの線にそうようけんとうしている。しかし手間ひまのかかることであるから、その点ご承知願いたい。

と、「落合秘境」保全が確約され、その後の公園化を「手間ひまのかかること」であるが「独自の判断でできないこともない」と担当部署が伝えに來た。公務員宿舍のこれ以上の建設は止められ「落合秘境」の保全は次の「公園化」の段階に進んでいくのである。

### ③署名活動の展開

「落合秘境」保全活動において特筆されるのが、地域在住の文化人らを中心に地域ぐるみで進められた署名活動であった。民意を示し世論を動かす手法の一つとしての署名活動が進められていた。第27号の裏一面にあたる4面の「町ぐるみの署名運動 文化人を中心に375名集まる 町全体の代表に 安倍、南原、舟橋氏ら」では、この署名活動の全貌を伝えている。同面では、住居表示問題で下落合西部地区が中落合と中井に分割されることが決まり住民の怒りと嘆きが伝えられる中、6段の紙面を使って今回の地域ぐるみの署名活動を記録したのである。

おとめ山自然公園設置の落合秘境保護対策実行委員会では、三月二十日下落合一の四〇四、落合中学PTA会長井戸清隆氏宅に於て、新宿区青少年委員隼田敬次郎氏ほか一名が第一回実行委員会を開き、建築計画の調査、陳情書の作製、衆議院、文化人への働きかけ等を決め、これを実行した。署名運動は四月三日夜から始められ、期間は一週間とし、十日夜に切りあげ、十一日（日）整理、十二日蔵相に会う準備を整えた。このような署名運動は再びあるかどうか分からない。永遠に記念するためにここに一部を紹介し、労をねぎらう。

として、前例のない署名運動にかかわった関係者を紹介していくのである。

#### 下落合地域

署名の陣頭は左のとおり。

学習院長・安倍能成▽元東大総長・南原繁▽作家・丸岡明▽評論家・十返千鶴子▽作家・中村武志▽慶応大学講師・佐藤亮一▽示現会・三上知治▽光風会・伊藤応久▽作家・舟橋聖一▽二紀会・佐伯米子▽国会画・川口軌外▽新世紀・刑部人▽作家・船山馨▽私学連合会々長・牛

窪愛之進▽大日本印刷株式会社々長・北島織衛▽美術評論家・外山卯三郎▽広池学園学長・広池千太郎▽講談・伊藤痴遊▽早大教授・滝口宏▽日本版画会・吉田遠志▽人事官・島田巽▽武蔵大学教授・島田俊彦▽東京教育大教授・小林信明▽元毎日新聞社会部々長・小野七郎▽慶応大学講師・永田寛定▽新協美術・西原比呂志▽元衆議院議長・加藤鎌五郎

#### 上落合・西落合の応援

上落合地域の署名運動は、中村善策氏（一水会）や窪徳忠氏（東京大学教授文学博士）らが署名し、おこなわれた。西落合は富永惣一、滝口修造氏（共に美術評論家）が応援、小藤清巳氏の義父、ワシントン滞在の平塚運一氏（国画会）にも許可を得、小藤氏が代筆、一日で二十五名が署名協力した。これらの協力に対し、下落合実行委員らは、今後、上落合、西落合に重要な事項があるときは、惜しみなく協力すると云っている。

と、下落合、上落合、西落合の落合地域の署名活動に加わった文化人をあげている。安倍能成をはじめとしてこの署名運動に関わった多くの人物が『落合新聞』に寄稿したり、カットが掲載されていた。竹田は、「私は郷土誌としての企画に基き地域内に居住する知名人にはできるだけ寄稿を依頼していた<sup>40)</sup>。」と言っているが、そこで『落合新聞』と地域の文化人との関係性が構築されていた。『落合新聞』による落合地域の文化人ネットワークの効果がこの署名活動では表れていた。『落合新聞』は地域文化の核として地域に存在していたといえよう。

文化人以外にも、落合地域内の全8校の小中学校校長と「落合秘境」に近い戸塚第三小学校の校長や下落合一丁目町会、下落合二丁目町会、知久会、下落合三丁目町会の町会長の名が挙げられ、PTAでは落合第四小学校や落合第二中学校のPTA関係者、地域在住の医師、さらに「魚屋さんや八百屋さん、雑貨屋さんなど商店街も多数署名し、」と多くの地域住民の参加、地域外からの新協美術の田代光（台東区）や漫画家の加藤芳朗（目黒区）などの応援署名、そして最後にこの署名活動に署名を集めた各地域、町会の13人の運動員の名を伝えている。ここにオール落合ともいべき地域ぐるみの署名活動の成果が記録されているのである。

知名度の高い文化人に数多く協力を依頼することで注目度も高まり、全国紙にも「落合秘境」保全活動が掲載されることとなった。この署名活動の結果、世論に対するこの問題の認知度を上げることとなったことも「落合秘境」保全に大きく影響したといえよう。

#### ④池田正之輔の動き

田中角栄への陳情より以前のことになるが、地元在住の衆議院議員池田正之輔に協力を依頼したことが「落合秘境」保全を大きく前進させていた。陳情の約二週間前の4月1日に竹田と隼田敬次朗が池田正之輔と面会、「落合秘境」保全の運動への協力を依頼していた。この池田正之輔に対する協力の依頼については、1面「池田さんの一声でまず好転」に掲載されている。

四月一日、落合秘境保護保存推進会の隼田敬次郎氏ほか一名は、署名運動に先だち下落合三の一四九二、衆議院議員池田正之輔氏（山形県出身）を訪ね、落合秘境を保護し自然公園化する運動の協力を懇請したところ、快諾。ただちに建設当局、財務当局に電話、責任者に要旨次の通り伝えた。

今、政府は一本の木でも伐つてはいかん法律を作ろうとしている矢先に、大蔵省が先になって樹を伐るとは何事か!すぐに善処するように。庶民の住宅を建てるならともかく、役人が、しかも高級公務員が山手線のすぐそばに建てるなどとは、そんなことだから役人が何かと批判を受けることになる。君らの宿舎をこそ環状七号の先の方にすべきだ。地元はさわいでおるしこれは大問題になる。わしは同じ町内で足もとだ!黙っているわけにはいかん。すぐに内容を報告したまえ。

『落合新聞』の記録からみると池田はかなり強い調子で関東財務局に対して工事を批判している。電話を受けた関東財務局も池田の言に対して素早く対処せざるを得ず、翌々日の4月3日にこの件についての報告をしている。同じく1面「関東財務当局が池田さんに報告」にその様子が掲載されている。

四月三日、関東財務局管財部次長平野寿氏が下落合の池田邸に参上、次のとおり内容を報告した。

①今年度予算で現在建築中の処だけは建てさせてくれ。②森林は残す樹は伐らない。③沼に崩れた土は元通り取除く。池田さんは有名な愛樹家であることを附記しておこう。庭には見事な盆栽が百数十点ある。只今、川島特使と共にAA式典に出席中。四月末帰国の予定。

今年度予算の執行による建築中の部分のみ工事は終わらせること、森林伐採の中止、土砂の除去が約束され、「落合秘境」保全はここにはほぼ確実となったとあっていい内容であった。

また、1面最下段の「落合秘境の呼称は作為にあらず」、「大げさでもない」では、複数の批判に対する『落合新聞』としての反論も掲載している。

田中蔵相は陳情団に「落合秘境とはあなた方が勝手につけたのだろう」といい、秘境の命名は今度の行動を有利にするために突然つけた呼称のように解されているようだから、誤解をしておこう。

「落合秘境」と初めて命名したのは昭和三十七年七月本紙第三号で「落合の秘境、湧き出づる泉、流るるせせらぎ」と題し「落合尾根径」「森林に覆われた池」の写真と共に、一万部を町内に無料配布したのが初まり。次いで三十八年三月「むかしを語る落合の秘境」一万一千部以来、三十九年七月「落合秘境にえびやさわ蟹」（この頃南原繁氏に署名の賛同を得ている）

に至るまで、前月号を除く秘境に触れた発行部数四万三千部が配布され、多くの人が落合秘境と呼んでいた。作為でも唐突でもない。部数には印刷所、折込んだ新聞専売所の受取あり、念のために。

また、当局者の中には、秘境とは大げさという人もいたが、これも誤りである。昨年春頃まで森の片隅に小屋があり森番がいた。チャタレー夫人の恋人のような森番が。その頃までは人をよせつけず森番の夫人は見廻りをするのも気味が悪いといていた程文字通り鬱蒼とした落合の秘境であった。持主が替り森番がいなくなってから人がやたらに入り込み、日一日と荒れてきた。不心得者によって山火事を起したこともある。この山をこよなく愛してきた人々の愛情と執念が、たまりかねて今回爆発したともいえる。われわれは一日も早く秘境を元の姿に戻したい。

と、今回の保全活動を「愛情と執念の爆発」と総括し、「一日も早く秘境を元の姿に戻したい。」と保全後の活動を見据えて記事を結ぶのである。

#### ⑤コラム「七曲り」と「理由書」—「落合秘境」保全の総決算

「落合秘境」保全の総決算号的な位置づけの第27号の1面コラム「七曲り」は、なかでも竹田の心情が表れたこの活動に対する総括的な意味合いを持つ記事だといえよう。「署名運動を省みて」との見出しで「落合秘境」保全活動を振り返っている。

世の中にはひどい人もいるものだ。自分の家の前に公園を作り、横にはプール野球場と、目先でなければ満足しない人。数百歩も離ればもうそっぽを向く。これではどんなに優れた為政者でも面倒はみきれまい。落合秘境を保護開放するための運動は一地域だけの問題ではないだろう。そのことをよく知っている知恵ある者は、地域のいかにかわらず協力したではないか。近視眼的にならずもっと巨視の心でこの落合を見守ろう。

その二。公園作りでも何づくりでも、兎角一生懸命に何かやると、すぐに疑惑の目を向けたがる。選挙の事前運動ぐらいに考えて冷視する傾向がある。よい為政者が出にくいのは周囲にこそ責任があるのではないか。たとえ出るためであっても、その人の誠意をこそ知らねばならない。いろいろな運動を通じ、もしその人が出るなら、この人なら出してあげたいと思う人がこの落合にも一、二いる。やったことを自慢せず、吹聴もせず、強靱な意志力や観念や善意がその人を動かしている。しかしそういう人にも一言助言したいのは、政治家というのは一般の人間より粒が大きいものだ。少しぐらいの事にひるんではならない。

その三。落合新聞の発行は常識ではない。超越した基準に発行の意図をおいている。ゼロの立場から人間を知りたい、自分自身のために。前にも云ったように編者は選挙に出る意志は毛頭ない。流言蜚語など気にしないが、それが仕事の邪魔をして困ることがある。

その内容は3点にまとめられているが、「その一」の冒頭で「世の中にはひどい人もいるものだ。」、まとめの部分で「近視眼的にならずもっと巨視の心でこの落合を見守ろう。」との批判が述べられているが、「落合秘境」保全活動のなかでは竹田や『落合新聞』に対する批判もあったようである。「その三」で後述されているが、『落合新聞』の発行や地域でのさまざまな活動はしばしば「選挙目当て」との批判も受けていた。

「その二」の中でいう選挙に「出してあげたいと思う人」とは下落合地区での児童遊園設置活動をともし、「落合秘境」保全活動でもともに活動し、来る新宿区議会議員選挙に立候補の意向を示していた隼田敬次郎のことであろう。その隼田に向けて「少くらの事にひるんではない。」という激励の言葉となっている。「落合秘境」のすぐそばに家があった<sup>41)</sup>ということで途中より保全活動に加わった井戸清隆も同じく立候補の準備をしており、区議選に向けた隼田のライバルとなった。昭和42年の新宿区議会議員選挙において井戸清隆は当選し、その後、あわせて2期務めた。一方、隼田は落選している。

「その三」では、「落合新聞の発行は常識ではない。超越した基準に発行の意図をおいている。」との言葉があるが、ここに『落合新聞』発行に対する竹田の矜持が表れているといえよう。そして「ゼロの立場から人間を知りたい、自分自身のために」との言葉には文学を志した表現者(『芸芸首都』同人)としての作家性が表れており、一個の作品としての『落合新聞』を作っているという意味が表れている。『落合新聞』の機能として「町の利益を擁護する」、「落合の現勢を伝える」、「郷土史を編むことでアーカイブとしての機能」を果たそうとしている意図はよく見られるが、このような強く作家性がみられる表現は『落合新聞』の中には他に見られず、この活動に対する特別な思いが感じられる。「竹田は個人の責任のもと「地域との共同作業」を図り、ひとつの作品として『落合新聞』を作ろうとしていたのではないかと拙稿でも評価した<sup>42)</sup>が、この言葉はそれを裏付けるものであろう。

もう一つ、田中角栄大蔵大臣への陳情の際に持参された「新宿区下落合に自然公園・児童公園設置方 理由書」は『落合新聞』による「落合秘境」保全活動の集大成ともいべき一文となっている。4面に掲載された「新宿区下落合に自然公園・児童遊園設置方 理由書(転載)」は、

新宿区下落合一丁目三〇九番付近、国有地約八千坪の原生林と谷合は、「江戸名所図会」「嘉陵紀行」「遊歴雑記」にも描かれた風姿自然の佳境で、武蔵野の風景を今に残している得難い処であります。水涸れの季節でさえ、ここの泉だけはとどまることを知らず、せせらぎは谷合を流れ、野鳥は昼夜啼く。沢蟹や小魚のいるのは都内広しといえどもここだけになりました。夏は鬱蒼として暗く、「落合秘境」として広く愛されている所以であります。

政府は、年々都心から消え去りつつある緑地帯を保護するために、多大の努力を重ねておられることを、私共はよく知っております。

しかるに、このたび、大蔵省ではかかる稀な場所に、公務員宿舎建設を急いでおり、その一部はすでに建築中で、緑地帯の一部も崩壊されました。基本計画によると、近い将来には原生林、谷合も埋め、造成するとのことでした。

ここは、小学校、中学校と隣接し、災害には最適な避難場所でもあり、一方には工場地帯をひかえる密住地域であります。広汎な下落合台地の一、二丁目には公園および児童遊園もなく地元有志は数年前よりしばしば都、区に陳情し、併せてこの地が都民のオアシスになるよう保護保存を懇請してきたのであります。

またここは「おとめ山」（御禁止山）と称し、由緒浅からぬ処で、その一角は酒井大内記旗本五千五百石下屋敷の跡で、明治以後は近衛公爵家、相馬子爵家が所有する所となり、今回お願いの箇処は、相馬子爵家が多年自然庭園として保護保存に努めてきた処であります。

斯様な景勝地は都心なるが故に一層尊く、失われて初めてその貴重さが分るということのないようにしたいため、何卒、宜しく御審議の上、落合とその周辺の人々の夢を実現していただきたく、ここに有志代表連署をもって懇願する次第であります。

参考資料として現地写真十二葉および地図を添付いたします。

昭和四十年四月日

大蔵大臣

田中角栄殿

「江戸名所図会」、「嘉陵紀行」、「遊歴雑記」を引き歴史的な価値と、武蔵野の面影を残す貴重な自然といった「落合秘境」の風致について描写し、秘境が地域に広く愛されている理由を説明する。そしてその「落合秘境」の貴重な自然が大蔵省の公務員宿舎の建設によって破壊されつつあることを訴えていくのである。

「落合秘境」が隣接の小・中学校の避難場所としても有用であり、また地元では数年前から都、区に陳情し、都民のオアシスになるよう保護保存を懇請してきたという経緯と、下落合地域で設置が望まれていた児童遊園の必要性とが合わせて述べられている。

そして江戸時代以来、御禁止山といわれ、酒井家、近衛家、相馬家と所有者が変わり、その相馬家によって自然庭園として守られてきた歴史をもつ「落合秘境」の貴重な自然を失うことの無いよう「落合とその周辺の人々の夢を実現していただきたく」と保全を切々と訴えたのである。静かな筆致ながらもこれまで『落合新聞』で報じ、保全を訴えてきた竹田の「落合秘境」に対しての思いのこもった文章となっている。

#### IV. 「落合秘境」保全活動の結果と評価

##### 1. 保護活動のその後

第27号4面には、小さな記事ではあるが「落合秘境」保全後の活動を示唆する「対策協議会を設立 おとめ山自然公園設置」が掲載されていた。そこには、

落合秘境保護開放実行委員会では、四月十二日朝、田中蔵相に陳情したその日の夜、下落合二丁目のおにぎり屋「春」に集まり、これまでの名称を返上し、「おとめ山自然公園設置対策協議会」を設立した。これからは区や都に働きかけ、一日も早く公園化して開放する運動を推進する方針という。メンバーは左のとおり

として会長に井戸清隆、副会長に隼田敬次朗と落合新聞社内竹田の名が挙げられている。保全がなった後も公園化して開放する運動を推進するとして継続してこの問題にかかわっていくことが示されるのである。

「落合秘境」の開発は止まり、公園化が進められていくのであるが、その動きはなかなか進まなかった。第27号以降もほぼ毎号のように『落合新聞』には「落合秘境」関連の記事が掲載され<sup>43)</sup>、その終刊まで『落合新聞』のまなざしは「落合秘境」に注がれていった。「落合秘境」が「おとめ山公園」<sup>44)</sup>として整備され開園するのは、『落合新聞』終刊後の昭和44年7月1日のことである<sup>45)</sup>。その後、老朽化した公務員宿舎の用地を取得、整備をして平成25年4月13日拡張区域の一部が開園<sup>46)</sup>、平成26年10月26日に拡張整備が完了し<sup>47)</sup>、「おとめ山公園」は全面開園した<sup>48)</sup>。

## 2. 「落合秘境」保全活動の歴史的位置づけ

「落合秘境」保全活動は、高度経済成長期の落合地域の特質として、また、落合の郷土史の中にいかに位置づけられるであろうか。

昭和37年7月に『落合新聞』に初めて掲載され昭和40年4月に保全に至った「落合秘境」は、高度経済成長期にあらわれた歴史的景観や「風致」を守るという環境保全の全国的な潮流の中での比較的初期の成功例の一つであるといえよう。その成功の陰には『落合新聞』の記事による地道な啓蒙・周知と文化人をはじめとする地域の協力があつた。放射七号線建設による落合地域の分断が進む中、町会や文化人らの協力のもと保全活動は進んでいった。

地域アイデンティティとしてのみならず貴重な環境として保護すべき「落合秘境」について『落合新聞』は詳細にこれを調査し、記事化して周知・警告し、保護を訴え行動していったのである。その源泉である竹田の行動力には目を見張るものがある。秘境保全活動の手法としては、署名活動など文化人に協力を依頼し、全国紙への掲載を図って注目を集めるといった世論を動かすためのテクニックも駆使していった。署名運動では、文化人のみならず地域の学校・PTA・町会など地域ぐるみの協力を得ることで広く地域の民意を示そうとし、地元在住の代議士を通じて所管大臣である田中角栄に陳情を行うといった地域のネットワークを生かした活動も繰り返された。落合地域内には多くの文化人が在住しており、彼らを“利用”した落合の土地柄を活かしたといえる手法であった。保全活動の中心にあつた『落合新聞』には、それまでの地域での新聞発行というコミュニケーションの蓄積によって獲得した信頼があつた。その信頼が保全活動をリードするネットワーク・人脈の源泉となつたのである。地域との共同作

業ともいべき新聞の発行が保全活動の成功の根底にあったのである。

同時期には地域住民が主体となった環境保護活動が数多くあったが、同時期の成功例の一つである「鎌倉風致保存会」の活動と比較しても、進みつつある開発と自然を残したいという住民の心情、住民の団結、地域在住の文化人の参加、地域メディアのみならず全国紙への報道の活用、そして地域に根づいた活動と多くの共通点を見出すことができる。

『落合新聞』については、「高度経済成長下、人々が昔のことを忘れていく中で、落合の昔のことを丹念に調べ、江戸時代の落合の様子や、この明治時代の落合など、人々の記憶から消えてゆく落合の様々なことを取り上げていました。また、下落合の御禁止山について、落合秘境として自然のまま残すように呼びかけを行い、現在のおとめ山公園ができるきっかけをつくる等、過去のことだけでなく、落合の将来のことも取り上げるなど、落合のことを知るには欠かせないものとなっています<sup>49)</sup>。」と評価されている。町の現勢を記録し、『落合新聞』を地域のアーカイブたらしめようとした竹田の目的は達せられているばかりでなく、すでに『落合新聞』そのものが郷土史の一部となっており、この「落合秘境」保全活動もまた郷土史の一部となったのである。

## V. まとめ

地域において新聞を発行し保全活動をリードした竹田助雄は、落合地域における知識人の一人といえる。『落合新聞』の発行や地域ぐるみの署名活動などで「落合秘境」保全活動をリードした“行動する知識人”であった。その竹田を「落合秘境」保全に駆り立てたものとはいいたい何だったのだろうか。

一度失われた自然を取り戻すことは極めて難しい。「新宿区下落合に自然公園・児童遊園設置方 理由書」にも「失われて初めてその貴重さが分るということのないようにしたい」と述べられているが、地域の中のみならず、広く東京の中にあっても貴重なものであった「落合秘境」の自然は失われてからでは遅く、どのようなことがあっても失ってはならないものであった。「落合秘境」を失うことなく、後の世代に伝えることは、落合地域のまちづくりの中で大きな意味を持つ。そのことに自覚的であったからこそ、『落合新聞』の発行を通じて竹田は活動を進めていくことが出来たのであろう。「落合秘境」の保全とは、貴重な自然や歴史的景観を失われつつある歴史的景観や自然との対比の中で高度経済成長による地域の“近代化”の意味を問う作業でもあったのではないか。

「落合秘境」の保全活動は、『落合新聞』と地域在住の文化人、地域住民らが地域内部で協力し補完しあって、適法な範囲内ではあったものの、政治家の圧力で変更されるような乱開発ともいべき開発を制御したと同時に、公園化によって地域の貴重な自然と歴史的景観を守り、将来につながる持続的発展を実現したという意味で、地域に大きな利益をもたらした。それは、高度経済成長にともなう“近代化”によって失われつつあった自然や歴史的景観の価値を、新聞発行のための取材によって再発見することによって得られたものであった。この開発から

持続的発展への転換を支えたのが『落合新聞』の活動であった。地域とのコミュニケーションの中で積極的に取材し、地域資源の価値を再発見することによりこの転換が成されてきたことに注目したい。開発に対抗するために地域住民が地域のネットワークを活かし、地域の個性に合わせた持続的発展を追求していくという極めて落合の地域的特質を活かした保全活動となったのである。

放射七号線建設、住居表示による町名変更問題の進行といった有形無形の分断の中で、行政主体の大きな“近代化”の流れにのまれていった落合地域であったが、「落合秘境」保全問題では、地域の協力、文化人による活動、政治的な動きもあって保全という“勝利”を勝ち取ることができた。落合地域の将来に向けて大きな財産を勝ち得たのである。放射七号線建設に伴う文化村の分断、住居表示の実施により町名変更が予定されていたことなど地域アイデンティティの喪失が続く中で、「落合秘境」保全活動の成功は、地域アイデンティティの一つである貴重な歴史的背景を持つ景観と自然を守ったこととなり、その活動の中心となった『落合新聞』の大きな業績ともなった。また、『落合新聞』が目指した地域におけるアーカイブとしての機能のみならず、現代に働きかけることで、その活動そのものが郷土史の一部となった。貴重な自然という地域アイデンティティが失われてしまったかもしれない中、この「落合秘境」保全の活動とその記録は、地域アイデンティティを守らんとする地域の団結の記録となった。

野放図に進む開発、“近代化”による地域の有形無形の分断に対するアンチテーゼとしての保全活動の広まりがあった。そこにおける『落合新聞』の果たした役割とは、まちについての様々なことを取材して新聞を発行するという地域でのコミュニケーションの蓄積よって勝ち得た信頼をもとにして、「落合秘境」の歴史的・環境的な価値についての啓蒙と周知を行う保全活動の推進役であった。この活動の中で『落合新聞』は、多くの地域住民の期待や後押しを得た。地域からの有形無形の後押しがあって結果として「落合秘境」は守られたのであった。『落合新聞』50号の歴史の中でも1つのトピックとしては最も多く取り上げられたのが「落合秘境」に関する記事であり、「落合秘境」保全活動は『落合新聞』を象徴する活動となったのである。

### 【注】

- 1) 昭和40年10月9日発行『落合新聞』第31号2面
- 2) 昭和42年8月10日発行『落合新聞』第48号2面
- 3) 拙稿『『落合新聞』の研究(1)』『目白大学短期大学部紀要(50)』平成26年
- 4) 竹田助雄『御禁止山—私の落合町山川記』昭和57年 創樹社 305ページ「あとがき」
- 5) 首都圏では、終戦後、特に高度成長期にかけて、地方からの人口の流入が地方への流出を大きく超過して推移し、人口の大幅な社会増が続いた。首都圏人口の社会増は、1950年代前半の5年間に147万人、後半には156万人であったが、高度成長期が始まった60年代前半の5年間では186万人、後半にも136万人の純流入が起きており、60年代の首都圏の人口増加のほぼ半分を占めている。また、同期間の人口の自然増も、若年人口の増加や高い合計特殊出生率等を背景に、50年代前半が90

- 万人、後半が88万人の増であったのに対し、60年代前半には129万人の増加、後半には174万人の増加を記録し、首都圏人口全体の増加に大きく寄与した。この結果、50年に1,305万人、60年に1,786万人であった首都圏の人口は、60年代前半の5年間で17.6%、後半の5年間でさらに14.7%増加したことにより、70年には2,411万人にまで達し、50年から実に8割以上も増加することとなった。(内閣府「首都圏人口の変化の長期的推移」)
- 6) 佐藤晶『日本公園緑地発達史 上巻』都市計画研究所 昭和52年 序v~vii
  - 7) 矢代幸雄「日本美亡びんとす」『文藝春秋』昭和36年6月号には、「まるで現代歓楽街の「できもの」が吹き出たように、何たる醜態であろう。」とのその景観に対する批判が掲載されている。
  - 8) 昭和34年から奈良国立文化財研究所によって行われていた平城宮跡の発掘調査地の一面に近畿日本鉄道の検車区建設許可が出たことが報じられた。(昭和37年2月28日『朝日新聞』朝刊11面)その後、池田勇人首相が平城宮跡を国で買い上げることを表明している。(昭和38年1月22日『朝日新聞』朝刊1面)
  - 9) 『京都タワー十年の歩み』昭和44年 には建設当時の賛否が収録されている。また、京都を愛する会『古都の破壊:京都タワー反対の論点』昭和39年 には、学者・作家・財界人など各界の文化人240人の署名者の名が掲載されている。署名者の中には『落合新聞』に関わった人物では、学習院長安倍能成、作家北杜夫の名もみられる。
  - 10) 「売りに出た名勝—京都 雙ヶ岡—」、『週刊新潮』昭和40年3月8日号「間にあった古都保存法—京都・双ヶ岡—」、『朝日ジャーナル』昭和41年vol.8 No.6
  - 11) 昭和40年1月7日『読売新聞』夕刊6面 都民版「都民の緑をふやす」
  - 12) 佐藤昌『日本公園緑地発達史』下巻 昭和52年 都市計画研究所 88ページ
  - 13) 拙稿『落合新聞』の研究(5)『目白大学短期大学部紀要(54)』平成30年
  - 14) 「東京における緑地侵犯に対する協議会について」『都市計画』(45)昭和40年 59ページ
  - 15) 昭和40年4月2日『読売新聞』14面「国民に“緑”を返せ」
  - 16) 「公園緑地侵犯対策運動を各地でおこそう」『都市公園』(38)昭和40年 26ページ
  - 17) 昭和40年3月1日『朝日新聞』朝刊12面
  - 18) 昭和40年3月29日『読売新聞』朝刊1面 社説「選手村跡を蚕食するな」
  - 19) 昭和40年4月7日『朝日新聞』朝刊15面 この「東京の緑を守る会」が緑地侵犯対策協議会に発展していく。
  - 20) 昭和40年4月8日『読売新聞』朝刊14面
  - 21) 昭和40年10月8日『読売新聞』朝刊14面
  - 22) 昭和40年12月18日『朝日新聞』朝刊14面
  - 23) 昭和40年12月24日『毎日新聞』夕刊6面
  - 24) 昭和41年1月11日『朝日新聞』朝刊14面
  - 25) 木原啓吉『ナショナル・トラスト』平成4年 三省堂 16~17ページ
  - 26) 『同上』18ページ
  - 27) 昭和40年2月8日~12日『朝日新聞』「破壊される自然(1)~(5)」
  - 28) 『ナショナル・トラスト』20ページ
  - 29) 『同上』20~21ページ
  - 30) 拙稿「『落合新聞』の研究(2)」『目白大学短期大学部紀要(51)』平成27年
  - 31) 昭和38年8月11日発行『落合新聞』第13号2面「雑木林の虫」の冒頭で北杜夫は、「『落合新聞』の写真でみると、落合にも案外奥ぶかい林や清流が残っているらしい。こうした場所はいざ失われてみるとその貴重さがわかる。」と書いている。
  - 32) 越澤明「風致地区及び地区計画地区における景観形成の現状及び評価に関する調査研究 その一」『土地総合研究』14巻1号 平成18年
  - 33) 『御禁止山』148ページ
  - 34) 実際は4月8日に配布された。『御禁止山』249ページ

- 35) 昭和38年5月19日発行『落合新聞』第10号2面の隼田敬次郎「提案 下落合に公園を作ろう」の記事を東京都知事東龍太郎に送付した際の手紙で竹田は「落合秘境」についても併せて紹介し、その後の東京都建設局公園緑地部との面会においても時間をかけて説明していた。(『御禁止山』91～104ページ) 第20号での保全の意思表示の一年前のことであった。
- 36) 新宿区役所内の記者クラブを通じて(『御禁止山』250ページ)、昭和40年4月9日には、読売・毎日・産経・東京の各紙に、4月12日には朝日新聞の社説に「落合秘境」の問題が掲載された。
- 37) この第27号は通常よりも少ない部数で発行された。「おことわり」には「本号は希望者のみに配布する予定でいたが、記事の都合により例月通り折り込み配布した。但し部数は三千部だけ。」とある。
- 38) 庄内人名辞典刊行会編『新編庄内人名辞典』昭和61年 135ページ
- 39) 元自治大臣とあるが、池田正之輔が自治大臣を務めたことはない。
- 40) 『御禁止山』105ページ
- 41) 『同上』202ページ
- 42) 拙稿「『落合新聞』の研究(1)」
- 43) 新宿区議会議員選挙関連の記事が多い昭和42年5月19日発行の第46号、「敗戦の記録」が連載されている同年8月10日発行の第48号、同年9月21日発行の第49号には「落合秘境」関連の記事掲載がない。
- 44) 竹田はこの「落合秘境」の公園化に際し、その名称を「おとめ山自然公園」とすることを希望していた。(『御禁止山』275ページ)
- 45) 新宿区役所『新宿区広報』7月20日号 第571号
- 46) 新宿区『広報しんじゅく』平成25年4月15日 第2064号
- 47) この拡張の背景には、「落合の緑とおとめ山の自然を守る会」をはじめとする地元住民の強い意志と、「下落合みどりトラスト基金」の活動も大きく影響したといわれる。『落合新聞』による竹田らの「落合秘境」保全活動が、「落合の緑とおとめ山の自然を守る会」や「下落合みどりトラスト基金」などの活動の源流となっており、現在に至るまで地域における環境保全活動に多大なる影響を与えている。(『下落合みどりトラスト基金Web Stage』<http://www.jsc-com.net/shimoochiai/news5/827.htm>)
- 48) 新宿区『広報しんじゅく』平成26年10月15日 第2118号
- 49) コミュニティおちあいあれこれ『復刻 明治の思い出』平成10年 発行にあたって